



可認物便郵種三第省信選日六十二月二十一年一十三治明
行發日五十日一圓二月每 行發日一月八年五十三治明

復康清

政教時報

號四十八第

論說

佛教の見地に立ちて
社會問題を解釋す

(社説)

眞摯なる自覺

社會

(和田貞)

◎求道の精神 ◎宗教大會擴張會 ◎職工扶助令
◎獨逸各邦新教教會聯合に就て ◎中央黨の認
容法案 ◎人間の本質

▲濃州の三日▼

(海外時事)

雜錄

監獄未來の夢物語

(筑涯閑人)

労働者植民地

(池山榮吉)

視察

(近角常觀)

佛弟子小傳

(待山生)

▲教界彙報▼

古今

(近角常觀)

オーベルリーン

(待山生)

▲社會小報▼

佛教の見地に立ちて社會問題と解釋す

意を解せざるに至りては一也。

吾人は歐州現時の社會を見るに一方に殖産工業の發達と共に、他の一方には社會に於て財產上、勞働上、幾多の不平均を生じ、隨て、道德に、風俗に、教育に其弊害甚しきものあり、爲めに現時の社會を以て満足すべからざるものとなし、社會の改造を主張するに至る。十八世紀に於ては、第三級即ち一般平民が其權利を伸張して、國民輿論の中心となり、勢力の権機となりしが、第十九世紀に至りて、從來の第三級は今や中流社會として却て其數を減じ、其下に労働者なる第四級團を生ずるに至る、而して其第四級團に利益を與へ生活上に資するを以て目的とし、正さに社會問題は頭を擡げ來りて二十世紀の舞臺に於て其解釋を促し來りつゝあり而して未だ一定の解決を生ぜず、或は社會民主主義を主張して國家及び新教主義のものは保守的にして寧ろ國家社會主義に近く、舊教主義の者は教國主義を以て國家と相容れずと雖、亦義に反対せんとするものあり、又宗教を主位とするものあり、新教主義のものは保守的にして寧ろ國家社會主義に近く、舊教主義の者は教國主義を以て國家と相容れずと雖、亦痛く民主主義を撲滅せり、此の如く幾多の解釋ありと雖、何れも一掬の水を以て大火を救はむとするが如く、前途頗る困難にして、富者の益々富を吸收すること甚しく、從て第四級團をして満足せしむること益々遠し、吾人歐州に於ける社會問題の將來を考ふるに、未だ容易に其運命を卜する能はざる

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一一致を鞏固にし、國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形成する事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査する事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極の方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を駁絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむる策を講ずる事。

也。

基督教を解する者は曰く、耶蘇は畢竟社會救濟者に外ならず、當時下層の社會の困難を自由ならしめ、經濟的の危急を救ひ、權位の壓制に反抗して、人間の平等を主張し、一種の空想的計畫を作り、地上の困難を慰藉して、天國の光榮を樂しましめしものに外ならずと、若し此の説の如くならしめば畢竟一種のユートピヤにして現實的に何等の救濟をも施すこと能はざりし也、然れども當時の社會事情を考ふるに、たしかに當時權位にあるものは下層貧賤に向て何等の憐愍の情を有せず、膠制暴戾の下に怨嗟の聲を發しつゝありしは事實也、而して此時機に際して、彼が爲したる福音は少くとも宗教的生活の意義と連絡したこと明らか也、之を要するに其社會問題を解釋するの形式は貧者として、富者と戰ひ、賤しき者として位あるものと戰ひ、都ての方面に向て戰爭の方法を以て平和の天地を開かむとするは基督教本來の主義にして、歐州古來の政教的關係より近世に至りて社會問題の解決に至るまで一として此形式によらざるなし、此一點に於て吾人大に疑なき能はず、戰ひは果して克く平和を持來すべき資格あるか争ひは遂に克く他をして和諧なる世界を作り得る性質あるか、吾人は歐洲社會問題の解決方法が常に戰ふことを以て唯一の手段とするを見て其結局を怪しむもの也、十八世紀に

於で第三級團の運動の結果が佛國革命の血を以て歴史上に描かれたるを見て、其將來の行路を豫想し、人類平和の爲めに頗る寒心に堪へざるものあり。

佛教を解する者は曰く、佛陀は畢竟社會救濟者に外ならず、印度古來階級制度頗る嚴格にして所謂カストなるものは痼疾となりて社會を化石せしめ、活動を枯死せしむるの間に立ち釋尊自ら王族に出で、自ら其位を捨て、其富を捨て、成道の後、四姓平等を唱へて社會の病根を除き、理想的團体を形成せりと、此説亦社會の一方のみを見たるの説にして、宗教思想の本領と連關なくむはあらず、釋尊の出家は固と宗教思想の發芽たる精神的煩惱より出てたるものにして、四姓平等の如き直ちに一般の社會に向て強て施さむとする社會的計畫にあらずして、既に精神的感化を受けたる已上に於て互に實行せむとするもの、要するに精神的團体の成規也然れども自ら王族に生れて、永久之を捨て、顧みず、又社會に向て直接四姓平等を主張せずと雖、苟も精神的感化を世界に敷くを目的とせば其感化の及ぶ所社會上に結果を來すこと言ふ迄もなし、之を要するに其社會問題を解釋するの形式は富者は富を捨て、貧者と手を握り、位あるものは位を顧みずして賤しきものと起臥と共にし、社會間に築かれたるカストの城壁を開き相互の意情を融和せしめ、有無相通して貪惜する處なく、圓滿平和に佛教者か社會問題解釋の要點也、若し此信仰を動機として着々實際施設の道に就かは如何なる社會改良かならざらむ、政治家は須らく「淨土」の面影を實現するが爲めに、清潔の政治を爲すべし、實業家は「淨土」の面影を實現するが爲めすべし、若し此精神を以て、労働者教育、病氣保險、家族保護等百般の問題を解釋せば必ず刀を迎へて割くるの感あらむ。

眞摯なる自覺

今の政事家と教育者と學者と實業家と何ぞ其宗教に對する態度の冷淡にして曖昧模稟なるや、宗教にして國家に害あり

和の世界を來たさむとするもの、是佛教本來の主義にして日本古來の政教的關係を初として、國民道德の形式に至るまで一種の和氣藹々たる着色を帶ふる所以のもの皆此に職由せずむはあらざる也、吾人は信す、今後二十世紀の舞臺に立ちて眞個に社會問題を解釋し、圓滿平和の世界を現出せむと欲せ亦人に咀はれ、劍を以て向ふものは亦劍を以て報ひらる、吾人は戰が以て平和を持來す所以を知らざる也。

佛教の理想此の如く高尚にして適切也、要は唯、此理想を活用して、果して克く之を實際施設の上に現實すると否とにあり、東洋古來理想の點に於て確かに西洋に對して一日の長あり、然れども實際上の點に於て常後に瞠若たるを見る、佛教者が從來其教理を運用し、信仰の顯微せる決して西教の下に出づるものならず、然れども、之を社會に應用するの點に至りては頗る幼稚なるを見る。蓋し是れ日本に於ける社會事情か未だ西洋の如く複雜ならざるによると雖、一は理想界のみに重きを指きて現實界を顧みざるの結果也、苟も生ける信仰を抱き、苦める同胞を眼前に控ゆるもの、冥想一番其理想を此世界に實現し來れ、社會改善の策、着々として現はれ來らむ。

佛教に淨土なる思想あり、或は樂土こと云ひ「佛土」といふ是れ實に社會として最も完全なるもの最も圓滿なるもの、

て益なしとせば政事家たるもの何ぞ舊て之が撲滅を致さる、宗教にして教育の進歩を阻害し學術の研究を防碍するものとせば學者たり教育者たるもの何ぞ舊て之が粉碎に務めざる宗教にして實業の發達を遮塞し殖産の隆昌に害ありとせば實業家たるもの何ぞ進んで宗教の根絶を叫ばざる若し夫れ宗教が人心の根底より湧き来る必需の要求にして其政事家たると學者たると實業家たるとを問はず等しく皆其必要を自覺し自己の據て以て立つところ支柱なりとせば何ぞ真摯に之が研究を試し更に進みて實際に之を味ひ以て人生の歸趣を明かにし一切の行動をして偉大なる意義を有するものたらしめざる可らず政事家は即ち小刀細工の權謀をして其行ふところ悉く皆宗教的信念の發動するところに準せざる可らず教育者學者は其機械的と學究的態度を改めて信仰的態度によりて民心の陶冶に従はざる可らず實業家また其利己的詐欺的態度を棄てゝ信念の發現に基く慈惠と信用とを基として殖産の道に従はざる可らず有害無益と知つて尙之を放擲して顧ざるが如きは不忠實なり其一日も缺くべからざるの必要を認めて尙之を顧みざるが如きは不眞摯なり彼に非すんば即ち是れ二者何れか其一を撰まざる可らず然も現代の政事家なるもの教育家なるもの學者たるものまた實業家たるもの否社會の凡ての階級が爲すところを見る、進んで之を撲滅せんとするにあらずまた進んで之を擁護發達せしめんとするにも非ず冷々

宗教としてか意義に於て一新生面を開いたるは明かに民心の必順的要求に答へたる宗教的自覺の新現象に外ならず其元氣の磅礴するに當つてや一顧にも及ばずして直ちに元使の首を刎ぬ大元十萬の敗兵を迎へて綽々たる餘裕を存じ一舉之を西海の波に葬りたるが如き眞乎に快心の事跡國史中無比の光彩を發揮するものに非ざらんや、彼の露を恐れ獨り禪り戰々恐々として其鼻息を窺ふ現代の政事家はよろしく一時宗に對して慚死すべく吾人また自覺の念強固にして自ら恃むに篤かりし鎌倉時代の祖先に對して愧死すべきなり何ぞ今之の政事家と國民の顛々乎として自ら恃むことの薄きや、此他泰時が執權の重きに居て自ら捐尾の草庵に明惠止人を訪ぶて政の惡を欣聽したる時頗る鎌倉に諸宗の高德を招ぎて一席の清談に心耳を澄ましたる何ぞ其態度の眞摯にして物に忠實なる、思ふに鎌倉時代に於ける善政の基くところ凡てこれ眞面目なる宗教的信念の發現に外ならず、這般の現象は實に之を政治宗教の上に於て之を認むるのみならず人心の反影たる當時の文學と美術と共に皆生々たる活氣を負ひ之を奈良朝平安朝の華美虛飾に流れて生命なきものに比す啻に天壤の差のみに非ざるを覺ふ

想起す西歐十六世紀の譬頭に當て妙たるヰッテンベルクの教授ルートルが奮然驟起して宗教改革の義を唱導し、腐敗墨落したる當時の基督教に一新紀元を起し死せる基督教に活

澣なる生氣を與へて以て全歐の視聽を衝動したるや全獨逸國民はこゝに一條の活路を見出し謂れなき習慣の城として生命なき舊教の教權虛式に服せず馳せてこの新來の福音に耳を傾くるに至れり是れ恰かも獨逸民族が宗教的自覺を感じたるのいたす所、苟くも眞摯に人生を考へ來らんか安んぞ一日と雖でも無意義の生活を繼續するに堪えんや該博の識と溫厚の德あるメランヒトン起り熱血燃ゆるが如きカルヴァン立ち深遠なる學識と實際的傳道の精神に富めるツヰングーリ起り到る處真信仰の福音を傳へたるの状態かも是れ吾鎌倉時代に於ける新佛教諸聖か堀起して事實の上に佛教改革の功を完うしたるに比すべからずや、唯れか又邦人の宗教心に乏しきをいふものぞ

歴史は繰返するものなりといふ。時勢の變遷推移に伴ひて國民の宗教心に厚薄の差異あるは免かれざるところ遠く奈良平安朝の佛教により一度旺盛を極めたる佛教は年と共に其精神を消耗して餘弊獨り盛なりしも鎌倉に至りて更に燃るか如き國民の宗教的自覺を見るに至り更に六百有余年の武家時代を經由して再び其精神を失ひて以て今日に至る當現代の皮想を見て邦人の宗教心に疑を挿むものは未だよく事物の眞想を研めざる淺見者流の論のみ大勢の趨くところ今や再び國民の自覺を呼び來らんとす宗教を無視するの國家は強固ならず宗教と度外視して顧みざる社會には意義なく生命なく眞趣味の

繹るべきなし教育といひ實業いひその他凡ての人的現象は其根底に於て確然不動なる宗教的信念を有せざる可らず。嗚呼今之政事家と教育者と學者と實業者と何ぞ一度思を宗教の上に運ばざる其冷々たる態度淡々たる行動の何ぞ爾く不眞面目なる吾人の眼より之を見る彼等の爲すところ悉く皆是非ず起すにもあらず只冷々淡々として之を度外視する態度に至りては不忠實もまた極まれりといふべし吾人は切に今の社會が宗教に冷淡なるを責めんばあらす吾人をして早くこの過渡時代を過去に葬りて更に意義あり生命ある第二の鎌倉時代を迎へしめよ。

時 教 報

社 會

求道の精神

道を求むる須らく眞摯なるべし、蕪地直進すべし、一時の余裕を許され、一髪の猶豫を與ふべからず、抑々求道の機會を得る頗る難し、一たび其機會を得むか、是千歳の一遇、決して空しく之を逸せしむること勿れ、若し之を逸し去らむか、寧ろ初めより之を得ざるに如かず何んとなれば屢々道を求めて屢々廢せば遂に之に慣るゝの處あり、須らく之を得る

に至るまで徹頭徹尾飽まで求めて止むべからず、其求めて得さるの間は或は苦悶言ふべからざるものあらむ、然れども其苦悶はやがて來るべき歡喜の前兆也。安心の前驅也、益々苦しみて後益々光あるを覺悟せよ、一たびは山川草木皆愛色あり、否我自身、昏々として非情の土塊と撰ふなきに到るべし、一旦佛陀の心光を感じせむか、心神順に開け、該廓曠蕩として心宇宙に遍満し山川草木笑て我を迎ふるか如く全身油然として感謝の涙に咽ばむ經に曰く、譬へば大海を一人升量せむに、却數を經歷して、尙底を窮めて、其妙寶を得べきが如し、人、心を至し、精進にして、道を求めて止まざるあらば、會當さに効果すべし。何の願をか得ざらむと

宗教大會擴張會

米國シカゴ同會書記バウルケ・ラス氏より同會報告及び書信を寄せらる、氏が佛教研究に熱心なる皆人の知る所、昨年佛國に於ける萬國宗教歴史大會にも出席して熱心に其説を述へられたり、今亦去る千八百九十三年に於けるシカゴ宗教大會の目的を述へて曰く是決して新宗教を宣布せんとするにもあらず又舊宗教に反対し、破壊するものにもあらず、單に世界の凡ての宗教の間に朋友的關係を成立せしめ其代表者をして互に相知らしめ、領解せしめ各宗教の有する長所を認識せむとするにありと而して擴張會は其主旨を益々擴充せんとするもの也又清國天津傳道師ショーニー、カルドリン氏の提

令の發す蓋し、時宜に適したるものと謂つべし

海 外 時 事

◎獨逸各邦新教々會聯合に就て　夫の『アイセナハ新教々會々議』で獨逸各邦新教々會聯合の議が起つた所、全會一致を以て可決したことは、前號の『海外時事』に述べて置いたが、之に就き、近刊の『獨逸新教通信』に或る信すべき筋よりとして寄書があつた。で、其要領を左に紹介しやう

去る五月三十一日の『アイセナハ教會々議』に於ける獨逸各邦新教々會の聯合の必要を認めたる全會一致の決議はザクセン、コブルヒ、ゴータの教會廳の發議に係るもので、該發議は『アイセナハ教會々議』を發展して各邦教會の從来より層疊なる聯合の機關たらむるを以て其内容としたものである。抑もアイセナハ『教會々議』は從來たゞ教會に關する重要な問題を自由に討議し可成丈獨逸各邦新教々會の一致的發展を奨進するを以て其任務として居た。從て其決議は各邦教會廳に對して何等拘束の力を有しないで、教會廳には其決議を教務總會に提出する義務すならつた。こういふ工合であつたから會議に於ける各邦教會廳の代表者の議決権を其教會の大小に從て區別する必要もなかつたのである。

所が、右の登議に依る今後教會々議は十五名の常置委員を擔任すべしといふので、其選定の方法は大体教會の大小に比準すべしといふのである。中に就き。プロイセン諸州の教會は二十の議決権、新諸州の教會は十の議決権、爾各邦教會は總計四十一の議決権を有する割合になつて居る。而してこの比例に依て會議に於て選定された委員は殊に獨逸各邦新教々會の他の獨逸及び獨逸以外の諸教會並びに基督教にあらざる宗教組合に對する關係、獨逸海外領地及び外國に於ける新教徒の教事設計等の獨逸各邦新教々會の外部に對する共同の利益を代表し擁護するの任に當るべきもので、彼等は此點に付て各邦教會廳の全体を代表するの権を有し、豫め其の承認を経るとなくして行動し得るとなつて居る。但し各邦教會の教旨及び内部の制度に關する件は彼等の権限以外である。

委員は其行動を教會々議に報告すべき義務を有して居る、而して教會々議は原則的意義を有する件其他特に重要な件を教會々議直接の行動範圍に屬せしめ、夫の委員選定に於けること同様の比準に從て議決するも出來る。委員の對外共同事に關する行動を有益且有効ならしめんが爲め教會廳は其所屬にあらざる専門家

時 教 報

(七)

議に曰

宗教大會擴張會聯合の基礎

宗教大會擴張會會員は相互に左の如く盟約す、

- 個人的に毫も他人の信仰に付て語らざる事、但し相互の異點を親しく尊敬して論議すること、及び各己の信仰を明了に告白するを妨げず、
- 得らるべき凡ての方法により口演により出版物により、其他得らるべき機會に於て兄弟的尊敬の精神、及び他人の信仰に向て正直なる尊敬を公然獎勵する事、
- 信仰の主要なる部分を組立てざる其純潔に有害なる、親密なる關係に最も強き障害となる凡ての實行及び儀式を各國人民中に行はしめざる様勉むる事、
- 吾人自身の信仰及び國家の人民間に改良、進歩、文明、政治的自由、社會改良を進むるか如き方策を獎勵する事、
- 同一の貴き原因に共に接觸する能力及感化ある人々を記入することは地上に於ける最も神聖なる事業の一部として之を尊敬する事、

職工扶助令

東京及び大阪に於ける砲兵工廠に對する同令を發布せらる、一時賜金、終身年金、遺族扶助料等相當の手當あり、本年九月一日より之を行ふ、今や社會問題の講究せられつゝ今日此

例へば教會法律家、教會歴史家若くは、教會相互間の關係、在外新教徒の關係に精通せる者を代表せむる事が出来る。尙ほ今回の發議に係る聯合は要するに各邦教會の聯合に止まるが、追て教務會(議會)の代表者をも會議に參列せしむるといふ事が断ててある。

教會會議は形式上此發議に付て議事を進めるやうおもへば出來得たのであるが、他に種々の議題もあるし、且此發議なるやう一寸に議了し得らるゝものではないので、委員附托といふことにした。で、該委員は可成早く其調査を終了して遠からず招集すべき臨時に報告すべきこととなつて居る。

兎に角獨逸各邦新教々會聯合の問題は今回の決議に因て其の果して成立すべきや否やといふ境を脱して、如何にして實行さるべきといふところ迄進んだのである。

◎中央黨の認容法案 獨逸帝國議會は去る六月五日中央黨の提出に係る宗教行使自由に関する法案(加持力黨)即所謂認容案を六十に對する百六十三の多數を以て可決した。該案はもと第一第二部から成立して居たので、中央黨に取ては特に此一部が必要であつて、若し是が實行されることになれば、現在の國家教會關係に一大變更を來すべきものであつた。が、其肝腫の第二部は形勢の不可なるを看て中央黨自身に於て撤回してしまつたので、殘るは第一一部のみであつた。併し此第一部といふのは從來各邦の法律で決めてあつた三點を帝國の法律で一定に決めたもので、よしこれが實行さるゝとしても、形式上の變化ばかりで實体上に於ては從來と大差なきものであるのだ。で、帝國議會に於てはこの第一部が可決されたが、聯邦會議は之を承認するや否や疑問である。現にザクセンの議會で、今回帝國議會で可決した認容案に對して政府は聯邦會議に於て如何なる態度を探るかとの質問に付て教務大臣は政府は聯邦會議に於て反対すると答へたといふとする。中央黨提出の法案に付てはいづれ詳論する機会があらうと思ふ。

監獄未來の夢物語

筑 涯 開 人

雜 錄

はしがき

頃日小聞を得て監獄未來記と題する獨乙本の小冊子を讀む。編者はドクトル、キツクエーベンと立派に署名してあるが、これは恐らく何人かの變名であつて、其實は矢張り斯道に關係ある其れ者の筆に成つたものであると思ふ。戲作とは云ふものの、讀みもて行くに從て益々趣味の深さを感じた所からして、一つ之を反譯して見よふと實は筆を執つて四五枚書き下して見たのである。所がナカノ文體が面白く纏まり兼ねるので到頭倦氣が來て筆を投するの止むを得ざるに至つたものゝ、全く之を読み放しにするも惜しいやふな未練も起り責めて筋書の大体なりと紹介して置いたなら、他日何人か之を潤色して面白く一篇の夢物語を仕組む數寄者が現はるゝことのないとも限らぬと思ふて、此に極めて荒らまかに其趣向の一と通ふりを述べることにした。

第一回 (案内者は囚徒の一人)

人物は新出來の辯護士と言つたやふな灰殻男、此男或日の

岐阜の山は絲堆く、蒼々として洗はれたるが如し、人をして自ら清爽の感を抱かしむる、某畫家は日本中の旅行したが、老樹鬱々として、而かも紅葉に侵されぬ山は、伊勢の神木山と岐阜の金華山との話である。子は三月已前に一寸来て、又間もなく七月廿四日養老の講習會へ往く途中、此處に立寄りて、山容樹色を眺めて何となく、言ふべからざる感慨を生じた、養老から泉君も來られて、岐阜佛教育年會の爲めに講話をした、背年諸君熱心に傾聴せられたので大に感ずた、講後萬松館から長良川へ案内されて、百忙中一小閣を得て、私が冥加を恐れた、長良川に架れる橋金華山の様子、丁度昨年の今頃櫻堂上人に從ふて旅行したガーテンバハと云ふ處の景色に似て居るので昔の感に堪へなんだ。

翌廿五日早朝岐阜を發して五六里も隔りたる揖斐町に行きた、講習會が地方の爲めに演説を聞くのである、揖斐町は隨分田舎であるが如何なる因縁にや當て二度も來た處である、町の中を遊漫として流れつゝある小流、舍場に宛てたる大乘寺、一として舊相識ならぬはない、稻葉君、上田町長を初め、僧侶も有志家も青年も皆知りて居る顔ばかり、特に已前に來りたる時信仰上の問題につき最も眞摯に質疑をせられた當町高等小學校長が、其後教科書事件で紛擾のあつた八幡町の校長に轉せられて、同町の人々の心眼を得て居るを聞きて大に満足した、其日午後泉君と車を飛ばして、夜十時過養老掬水樓に着し眞岡君八木君に遇ふた。廿六日曉初めて窓外の景色を眺めた、前の峯に満つる松が何れも古色蒼然として其枝ぶりの古雅なる、山が低きにも拘らず幽遠の感がありて實に靜寂の境である。

午後大垣で西洋の宗教教育、青年會の組織及會堂に就きて話したが、話の後一老人が狂歌の如く、大に懸慨して其抱負を述べられたには驚いた、其夜歸京の途に就きた、濱洲三日の闇を期はり、甘露の法水を掬して、我が信仰の懐渴を醫さしめ賜ひたるは、心中深く感謝の情に堪えぬ。

かく疑念を抱いて居つたばかりでなく、寧ろ當つて碎けろで出来なければ夫れまでなり位の覺悟は持つて居たのである。所が、典獄に遭つて來意を告げて見ると、案外容易に許可を與へて呉れたのみか、頗る好意を表して歡迎到らざる。勿論辯護士の肩書のあつたが爲めでもあらうが、文明典獄の摸範とも謂はるべき人だけあつて、流石に昔し流の行刑密行主義を探るやうな禪冥連とは其撰を異にする所が見られる。典獄は自身で案内の勞を執るべき筈であるが、無據い差支へがあると云ふので、特に一人の案内者を撰定して呉れたのだが、其案内者は囚徒の一人で而かも念入りの習慣犯者で、懲治場入りの抑もより奥州の果てから筑紫の隅み、監獄と云ふ監獄は殆んど全國に涉つて實驗し盡くした札附の代物、當監獄に入監してからも最ふ十年餘りになると云ふことである。典獄が此男を自分に紹介して呉れた時に某君……昔しは囚人を呼ぶに中村だと勘太だとかすべて其氏名を呼

びつ放しにしたものださうだが、今は恐く何君とか何さんと號呼ばりなどすることは一切禁止することになつたと云ふことである。斯くの経歴ある方で監獄事情に精通することは勿論、學理のこと制度のことすべて其謹奥を極めて居ると稱賛到らざるなしであつた。監獄學校でも出來たら此男などは差向き専任教授に抜擢せらるべき人物であるが、恐らく年俸千圓位の安賣は承知罷りならぬと頑張る方である。尙ほ此男に就て典獄が様々と其學識經驗を吹聾する咄の末に此男流石に多年の監獄生活に實驗する所あるが爲めに、其最も得意とする所は獄制沿革史であつて、沿革史と來たら誰が何と言はふか全國殆んど此男に及ぶものはなからふとのことで、現に近刊の監獄新聞に此先生の編著にかかる論文が掲載せられて居る。それがまた非常の出来で大學などでは慥かに博士の稱號を付與すべき價値があると評して居ると云ふことである。監獄新聞……どんな新聞であるか未だ聞いたことはないが、恐らく監獄協會雑誌のやふなものであらふと思つて、念の爲め典獄に質して見ると、案外にも是れこそ真正の監獄新聞で一般の囚人に購讀せしむるが爲めに編輯印刷共に四人の一手に成るものださうである。是れは昔しく既に亞米利加の監獄に實行せられたものであつたさうだが、其當時の我が監獄の當局者などは誠に顧冥淺慮なものであつ

治安を妨害することのある場合に對して如何なる方法を以て之を取締まるかと質したら典獄の答へにソレには懲罰と云ふものがある。懲罰と言つても昔のやふにヤレ減食だの暗室だのとソシな野蠻の方法を用ふる譯ではない。殊に亦た囚人と雖も一個の人類であつて見れば、固とより銘々勝手の自由思想のあるべきは當然であつて此思想を強壓して唯だ盲滅法に監獄の規律に盲從せしむることは文明の遇囚主義に適せぬことである。其れ故、多少の犯則位の事はすべて之を寛容する方針であるが……千幾人の多數を拘禁する此監獄に於て一年間懲罰を受くる者僅かに十幾人の少數に過ぎずとて典獄先生頗る得色あり……餘より危激の議論などを悉にして漫りに當局者の施政を妨害するが如き者に就ては時として涕を揮て懲罰を加ふることもある。但し懲罰を加ふるからと言つて從前の如く下僚の取調べと其意見とに依て之を盲斷するに非ずして、囚徒の入撰に成る懲罰委員會の決議を俟て始め適當と認めたる文明的懲罰を執行する手續であつて、謂は名譽裁判の審問に付する譯である、名譽裁判の仕組は實に廉恥に欠乏したる囚人を感化する上に於て非常の效益を與ふるものと謂はざるを得ぬ。ソレから又疎か教育の事に移つたのが典獄の説に是れも亦た昔しとは全く其趣を異にして今日では昔のやうに唯だ形式的簡単なる讀書、習字、算術位のこと教へてソレで教育の能事足りとする譯でない。讀

是書、算術、これが生存競争場裏に立つて何の役を爲さふか、四角な字を覺えた所でソレで飯の喰へる譯でもない。忠孝仁義の道を知つた所ではそれが金になる譯でもない。其れ故今日では囚人に對して専ら高等の科目即ち哲學、論理學、刑法、刑事訴訟法、辯說學、理財學と云ふやふなものを教授するのであつて、之を研究するの結果は出獄後自營の道を立つる上に於て、非常の效益を與ふことになる。衣食の道を得ると云ふことが強ち自營の策に適ふたものではなく、先づ第一に己れの權利を保全するの手段を講ずることが必要なので、監獄などへ来る者の多くは法律は知らず、さりとて辯護人を頼む資力も無いが爲めに見す／＼不法の裁判を受けて所謂冤枉になり通曉して法律上罪となる行爲と罪とならざる行爲との分界を知り且つ豫め訴訟法の手續でも心得て居れば幾らも無罰せらるゝ所の者である。若し法律殊に刑法なり刑事訴訟法であります。若し法律殊に刑法なり刑事訴訟法なりに通曉して法律上罪となる行爲と罪とならざる行爲との分界を知り且つ豫め訴訟法の手續でも心得て居れば損失相償はざる割の悪い犯罪行為などは頼まれても之を敢てするやうなことは無い筈である、監獄で此教育法を實施してからの成績は誠に著るしいもので今日では出獄者にして代業者なども營んで立派の暮しを爲して居る者も甚からぬ實況である、己れの權利を保全するのみか人の權利まで保全して成るべく監獄の厄介物を減じてやると云ふことは、是れこそ實に一舉兩得犯罪防遏の

法を得たるものと謂ふべきである。滔々述べ来る典獄の高説、聰くに從て益々其感を深ふせざるを得ぬだが、是に余は一つの疑問を發したと云ふは外でもない斯かる高等の學科を教授すべき適當の教師を得るに困難の事情なきや否やと云ふことである。典獄は之れに答へて曰く昔しと違ひて今日では學士の肩書を持つて藥店の丁稚代書屋の小僧を勤めて居る者のある世の中であれば月給の二十圓も與ふれば希望者は有り餘まる程の申込であつて却て其擇擇方に迷ふ程の次第である。所が其實、外から學者を聘するまでもなく囚徒の内に立派の博士もあれば學士も居る、別して私立法律學校出身の者などはない。法律を學んだ者がこんなに多く監獄に來ると云ふのは余が前に述べた議論と少しく抵觸するやうであるが、此處が則ち一般の法律學と監獄的法律學と自から着眼研究すべき點が異なる所であつて其異る所は則ち多年の監獄生活に依て始めて自然に領觸することが出来る。其處で今現に法律學を受持てる居る所の者は大學出身で大審院檢事をも勤めた刑法専門の名家であつて是れは不法監禁の犯罪で處刑せられた者である。經濟學の受持教師も亦た博士の稱號までも持つて居る所の者で富籤達犯の廉で何万圓と云ふ巨額の罰金に處せられた所が流石に經濟家丈けあつて納金を拒んだが爲めに二年以内の範圍に於て換刑處分を受けた者だとのことである。

余が案内者として撰定せられたる所謂監獄學者先生の名を熊坂長範字を泥長と云ふ熊坂君と呼んで是れから愈々泥長君に導かれて監獄内部の參觀が出来る段になるのだが此處らで先づ一服休むことにしよう

視

察

勞動者殖民地

(附) 流浪者作事場

池上榮吉

『仕事の欠亡は社會體に於ける最も恐るべき腫物で、其の害の及ぶ所、殆んど測るべからざるものがある』(アードラ)。『不規則なる仕事と必ず之と伴ふ不規則なる生活は、貧窮、零落の所有原因中最も大なるもので、此が變更の人民の幸福に資するとは、他の何事よりも多いであらう』(チャーレス、ブース)。仕事の欠亡といふとが社會問題中最も重要なものの、少くとも其の重要なものは、一であるといふとは、學說、黨派の奈何を問はず皆悉く一致して居る所である。夫の第十八世紀末より第十九世紀の初にかけて歐州諸國に行はれたる

大仕掛の労働院、千七百八十九年及び千八百四十八年巴里に起りたる國民作事場の如き、其他夫の労働組合、労働紹介の制の如き、將た又近時瑞西に其端を開いたる労働欠亡、保險の如き、孰れも皆直接間接に仕事の欠亡に對する、實地の救濟策を講じたもので、而して今此に紹介せんとする労働者殖民地、流浪者作事場も亦畢竟此目的に出てたる。但し労働者殖民といふも労働者を海外の領地、若くは外國に移住せしむるといふ義ではない、單に内地の或一地方を下して、こゝに或る期間居住せしむるので、恰も夫の貧民兒童の夏期殖民といふのと同様である。

労働者殖民地

沿革

労働殖民地は普漏西ビーレフードの牧師フォン、ボーデル・ショウイングの創設に成つた仕組で、是と類似のものは既業に千八百十八年に於て和蘭の工務大臣ボッシュが施設したが、終には國家の強制労働院となつてしまつた。プロイセンではヘルトリンゲン、ヤクソン等が千八百三十年代に是に倣て以て浮浪乞丐を制すべしと主張したとがあるが、其意見は實際に行はるゝに至らなかつた。所が千八百七十年代となつては、諸種の經濟的、政治的理由からして、獨逸諸邦に於て一定の生業を有せずして諸方に流浪する輩が凡そ二十萬人も出來

て、爲めに公安の上にも甚なからぬ危害の及ぶ様になつた。抑も是等の生業を有せざる者の中には、元來自活するに足る労働能力のあるものとないものとあつて、又其の能力ある者の中にも、労働を厭て生業に就かざる者と、労働は厭はないが差當り口がないので止むを得ず然るものとの別がある。而して此最後の者こそ即労働殖民の主たる客体で、該制は其をして獨立榮譽ある生計を營むに至らしめんが爲めに起つたのである。

ボーデル・ショウイングが設立當時の状況を人に語つた所に依ると、始め彼は専ら癪病者の殖民をやつて居た所が、其處へ毎日の様に貧窮する流浪者がやつて來た。そこでは等の者に對しては決して金錢を給與したとはなかつたが、望に依ては一飯の食を恵むのを例として居た。で、八箇所の互に遠く隔つて居る炊事場で、毎日盡飯の馳走を受ける者は平均二十人乃至三十人程あつた。斯うして居れば決して温施の弊はない」と信じて居たので、初の程は別に監視をすることもなく、同情に富んでる救護婦は一度自分の受持のところで食事をした者が一週間若くば二週間の後に二度三度と重ねて来て來て更にまた順番に廻はらぶといふ者のあることが發見された、爾來労働者はまた食ふべからずといふ言に從て食を求

むる者には鋤鍬をあてがつて一時間の労働を要求することとした。すると、それからといふものは從前と打て變つて、日々二十人三十人もあつた御客の數が忽ち僅か二人か三人に減じて了つた。この少數の者は喜んで鋤鍬を手にして働いたが、さて斯うなつて見ると彼等は更に『何事私共を今しばし御留め下さつて仕事をさせて頂きたい、私共は今から何處といつて行く宛のない者で、乞食をするのは忍びないし、さうかといつて仕事はなし、誠に困りますから』と哀願して來た。で、今度は勢ひ彼等の爲めに何處か仕事の口を見付けてやらなければならぬこととなつた。所が、彼等を引受けたやつてもよいといふ方では、彼等の行裝を一見してどうも此着物では恐入る、是はどうか一つ更へて貰ひたいといふので、仕方がない、先づ衣服の心配からしてやらなければならぬこととなつた。して其料金はどうして拂はせるかといふと、矢張仕事をさせて、其賃銀で支辨されるより仕様がない、と斯ういふ様なわけで、段々と今日殖民地に行はるゝいろ／＼の規則條件が成立したのである。

ボーデルシュヴァイングの初めて労働者殖民地を開いたのは千八百八十二年で、其處はビーレフェルトの傍なるウイルヘルスドルフといふ村である。此施設は忽ち四方の喝采を博して獨逸諸邦は勿論、英佛埃及丁蘭瑞西等の諸國も相踵いて之に倣ひ、現に着々其の歩武を進めつゝある。が、這回は専ら獨逸

逸に付て述べるととしやう

先づプロイセンに於てはボーデルシュヴァイングの主唱に依て労働者殖民地及び流浪者作事場の設立を目的とする會が出来て、ボーデルシュヴァイングの友として親善なる當時の獨逸皇太子で、後のフリードリヒ第三世皇帝なるフリードリヒ、ウイルヘルムを其長に戴いた（皇太子は千八百八十五年其の銀婚式の賀節に際し十七萬馬克を特に労働者殖民地の爲めに寄附した、是は今日も皇太子基金として存して居る）。プロイセンに次でベイエルン、ザクセン、ウェルテンベルヒ等の諸邦にも續々同様の會が組織された。

千八百九十三年以來流浪者作事場の方には別に獨立の中央本部が出來て労働者殖民地の方とは全然分離するとなつた。而して労働者殖民地の中央本部は千八百九十六年更に女子労働者殖民地の開設を決議した。

ウイルヘルムスドルフの労働者殖民地に繼で、新に開設された植民地の數は、千八百八十三年、八十四年には各五、千八百八十六年には三、千八百八十八年には四、千八百八十九年には一、千八百九十一、九十二年には各二、千八百九十四年、九十六年、九十七年には各一の割合である。即現今では總計二十八の労働者殖民地があつて、中、四つは舊教徒。他は皆新教徒の設立したものである。而して猶此外に女子労働者殖民地と所謂労働者永住殖民地といふものがある（統計參照）。

(看)

方 法

労働者殖民地は、差當り仕事のない、而も仕事を求むるものに仕事を與へ、其をして規律ある生活と宗教的加効とに因て、再び榮譽ある生存の端を啓かしむるを以て其目的とし、多くは官の補助を受けて居るが、全く獨立して其事務を處理する所の純然たる社會的慈惠事業である。從て官の施設に係るものでなく、何人も殖民地に收容さるべき権利も有たなければ、また其の義務をも有てゐない、労働殖民地は不幸にして仕事を得ざるものと、仕事が厭々と生業に就かざるものとを明確に區別する機會を與へるもので、或る期間勉強して仕事をしたものには、他に其能力相應の生業を見付けてやると精々盡力するとになつてゐる。

殖民地に於ける仕事は主として農業及び林業で、工業は地方の事情其他已むを得ざる場合に限り之を爲さしむるとになつてゐる、現に農業を主とせざるものはベルリン、マグデブルヒ、公 ブルヒの三殖民地のみである。

殖民地の経費は寄附金と、殖民者の労働と、國家若くは地方團体の補助金から支辨されるので、此補助金はなかなか少ぬものである。例へばカールスボーフ殖民地には十三萬一千二百五十九馬克、フリードリヒスハイマー殖民地には十二萬二千馬克、エルケルロート殖民地には十萬馬克、アンケン

ブーク殖民地には八萬三千八百馬克を與へられ、又リップブルク、リンド殖民地には四十萬二千五百六十馬克、アイエライ殖民地には二十四萬四千九百馬克、ガイスピドルフ殖民地には十三萬一千五百馬克を無利息で貸與された。

殖民の事務は委員會が司つて居て、經濟、秩序の維持、收容の許否等、一般の事務の執行は家父（事務長）が之に當り、其下には若干の補助者があつて家父の指揮に從て働いて居る、而して教誨教育等、總て教養的事務を主として教師が之に當るととなつてゐる。

現存の總ての殖民地は共同時間を規律せん爲め、一の聯合を形作て、其上に中央委員會なる組織がある。而して該會は通常毎年伯林に開くとなつてゐる。左に該會の決議せる原則の重要なものを掲げて此項を終るにしやう。

一、殖民地に收容するに就て（被收容者の身分、宗教、及び從來の經歷の奈何をとはざるべし、出獄人も亦收容されることを得（舊教の殖民地は舊教に屬するを以て收容の條件としてゐる）

一、殖民地の目的は殊に殖民者の道義を永續的に昂進するに在り。

一、仕事は農、林業を以て主とし、工業は之を止むを得ざるべし。

る場合に限る。

べし。

一、殖民地の規則は共通なるべし。

一、労働の報酬は當該地方に行はるゝ通常の労働賃銀より
低い値なるを要す。

一、不當の行狀の爲め或る殖民地より退去を命ぜられたる者、若逃走したるものは該殖民地の承諾を経るにあらざれば他の殖民地之を收容するを得ず。

一、各殖民地には司成労働紹介所を附置するを可とす。

統計

一、獨逸全体に於ける現在殖民地總數は二十八で、之を其所在地方に從て別けるとアロイセン十六、ペイエルン

三、サクセン、ウェルテンベルヒ各二、ペーデン、ヘツセン、オルデンブルヒ、ハムブルヒ、ルードルフスバッハ各

一の割合になつて居る。

二、創立以來殖民地に入りたる者の總數は、千八百九十七年の統計に依ると九万八千五百五十二人で、殖民地を出たるものゝ總數は九万五千六百十五人である。而して千八百九十八年の統計に依ると殖民地に入りたるものゝ數、十万六千六百七十七人に上つて居る。されば今日迄には少くとも十五六万の數に達したであらぶ。

三、殖民地總體に於ける労働日數は千八百九十七年度には六十万四千百二、千八百九十八年度には六十五万五千十

二である。但し労働日數は滯在日數とは異なりゐるので若し滯在日數で計算すれば更に多くなり。即千八百九十七年二十四の新教殖民地に於ける滯在日數だけでも六十万九千三百四十六となつてゐる。

四、今此滯在日數を同年度に於ける新教殖民地に收容せられたる者の總數六千六百八人に割ると平均一人の滯在日數百日少し餘となつて居る。

五、而して右六千六百八人を宗教別にすると、新教徒五千二百人、加特力教徒千四百人、猶太教徒八人となる。但此の外四の舊教殖民地では専ら舊教徒のみを收容すると前に述べた通りである。

六、創立以來千八百九十七年迄に新教殖民地に入りたる者の總數は九万二千五百四十八人で(一、參看)中、二万八十六人は他に仕事を得て殖民地を去り、四千四百五十八人は不當の行狀の爲め退出を命ぜられ、殘餘の者は任意に殖民地を去つた。

七、各殖民地(舊教のを除き)の一人一日の費用は平均八十
八、女子労働者殖民地は現今九つあつて、其目的は矢張男子のと同様で、只其仕事が洗濯編物等の家事を主とする點に於て相異つて居る。所謂労働者永住殖民地は、到底獨立して社會の生活を爲す能力なきものを一定の地に永

く出來たが、追に六かくなつて、当事者の尽力するにも關はらず、今日ではやう／＼五分の一位しか周旋する事が出來なくなつた。是れまた畢竟殖民者には体力若くば知識若くは道徳の点に於て、尋常人に比し劣るところあるものが多いのに因するので、現に殖民者の過半は出獄人であるところから見ても、周旋の容易でないことがしれる。が、其容易でないだけ、夫れだけまた此事業の必要を推察する事が出来る。要するに労働者殖民地は他の公私的社会的慈善的設備と相待て、社會の困窮を救濟する上に於て大に與て力あるものと認むべきものである。

住せしむる仕組で、是はまだ二つしかない。

九、リックリング、ウイルヘルムスドルフ、ケストルフの三殖民地には、飲酒に耽て爲めに労働を怠る者の治療所が附置されてある。

効果

無職浮浪の徒の減退は労働者殖民地の顯著なる一般の効果で、殖民者の道義の昂進、殖民地以外に於て殖民者に定職を授けると及び殖民者の労働に因る土地の改良は其の特別の効果である。道義の昂進といふとて關しては当事者の大に力を盡す所であるが、固より目に見へないものであるし、一朝殖民地を出てから爾後の生活に付て報道する者は極少いので、統計的に觀察するとは出来ない。が、千八百八十二年以來千八百九十三年迄の調査に依ると、年度と地方に依て多少の差異はあるが、平均先づ殖民者の半分は殖民地に歸復した者である所から見ると、彼等の多くは眞面目に生業を求めたのでないといふとが間接に推知される。從て其の道義的効果はさう著しいものでないといふことがわかるが、もと、殖民者の中では不健全な分子が最も多數を占めて居るのであるから無理もないとて、兎に角多少の効果のあるとは疑を容れないものである。經濟上の効果に關しては、殖民地に於ては農、林業を營むに、最近の進歩せる方法に依ることとなつて居るので、収穫の増加と共に地價の上騰を來すのみならず、中には、開墾

つた會で、其目的は個人を々が口口や往來で勝手に物を施すのは寧ろ害はあるとも益はない乞丐の患を除かんには、其の特別の需用に應する保護を與ふることが必要である。しかるに其の詳細の調査は到底個人の力の及ぶ處でないから、之が爲には或る會を組織して、之をして其調査の任に當らしめ事じやうじやうにて相當の救助を爲し、若し其救助を求める者が惰懶者じやうじやうにて相當の救助を爲し、若し其救助を求める者が惰懶者であるならば之を告發して處罰せしめやうといふのである。此會は一時は可なりの効力があつたが、如何によく組織され居る會でも各請求者に付て一々正確の調査をするといふとはなかへ行届くものでないので、遂に永續的の効果を収むことが出来ないで、或は解散し、否らされば當該地方に居住する貧民の救濟を目的とする會に變じて了つたものが多く、而して現に尙ほ存續しつゝあるものも、其目的は乞丐の救濟よりも、寧ろ乞丐の防遏にあるので、其救貧上の効力、甚た不完全たるを免かれないのである。

斯の如く、會の組織に依るもたゞ調査するばかりでは尙未だその正確を期するが出來ないといふとになつたので、今度は更に何か他に懶惰者と然らざる者とを區別する適當の方を講ずる必要が起つて來た。是に於てユルテンベルヒの或る二三の排乞丐會では、救助を仰ぐ者に對し流浪前正當に働いた者で、其のこゝに至つたのは止むを得ざるに出てたといふ證明を要求するか、さなくば現に仕事をさせて、以て其

一、給養所は相互に聯絡を通ずるを要す。
一、給養所は流浪者の乞丐する要なく、且給養所を濫用する能ざる程の距離に布設するを要す。
一、給養は流浪者の労働能力を保全するに足るものなるを要す。
一、給養は可成労働に服するを以て條件とすべし。
一、保護を拒絶すべき理由の存するときは、流浪者を直ちに去らしめずして、之に對し公の處分を要求すべし。
一、給養所は可成労働紹介所を附置すべし。

給養所は此の原則に從て儀の間に非常に發達して、千八百九十年には其數千九百五十七に上り、宿泊の數二百万に達した。プロイセン政府は千八百九十五年各地の委員の請願に基いて給養所に關する法案を議會に提出した。而して其第一條には『相互に適宜の距離を隔つる相當の地に給養所を置く、給養所は労働能力ある無一物の男子にして住所以外に於て仕事を求むる者に其勞働に對して食を給し宿泊を許す』とあつた。然るに此法律案は衆議院の否決する所となつたので、大に人氣を殺いだものか、千八百九十年には千九百五十七もあつた給養所が、千八百九十八年には千百五十に下つた即八百五十の減少を來した。尤も是は當時の一般經濟上の趨勢も大に興へたので獨り法案の否決のみが原因となつたのではない。

の果して懶惰者であるかどうかを確むるととした。尙ほ、金錢を給與するは、飲酒等の爲め濫費する弊に陥り易いとして、救助は必ず物品を以てするととした。此方法は從來に比して大に功を奏したもの、其の効力は初はたゞ當該會所在地の小範囲に限られ居たが、後大郡區内の町村が、此事業を共同に行はんが爲めに相聯合するに及んで、大に其範囲を擴張した。而して此事の一一番先きに實行されたのは大郡區グラウボイレンで其後之に倣ふものが頗々として起り、千八百八十一年にはウエルテンベルヒの大郡區六十四の中四十八までグラウボイレンと同一の方針を探るに至つた。爾來該事業の經費は公費を以て支辨されるとなり、或は全部大郡區の負擔に歸するところもあり、或は一部は大郡區一部は町村の負擔に歸するところもあるとなつた。從て從來は主として私の事業であつたものが、今や公の事業となるに至つた。

ウエルテンベルヒの例は忽ち他の獨逸各邦の模倣する所となり、終に千八百八十四年には『獨逸物品給養所聯合會』の組織を見るに至つた。左に掲ぐる規程は、即ち該會の決議中重要なものである。

一、給養所は其目的を達せん爲め可成丈同一の原則の下に、獨逸全体を通じて布設せらるゝを要す。

一、給養所は餘り小ならざる地方團體に依て設立せらるるを可とす。

最近數年來の該事業の趨向を見るに大に從來と異なるものがある。それは何の點に於てかといふと、從來は該事業を以て貧民救助の一種として取扱ひ、労働は之を正當なる救助の擔保として要求したに過ぎなかつたのが、近頃は労働の方が主となつて、救助の方が却て從たる地位を占むるに至つた上で、千八百九十九年政府の参考に供する目的を以て労働者殖民地聯合會議に於て議決せる法案は、明に之を證明して居る即該法案は其標題を『無職者保護に關する法案』と名け、其第一條には、完全なる労働紹介の設備を起すべきを規定し第二條に至り初めて救助のとが規定してある。而して從來の『物口口給與所』といふ名前を『流浪者作事場』と改めてある。以て其趨向の那邊にあるかを察する事が出来る。

終に臨んで労働者殖民地と流浪者作事場との差異二三を擧げんに労働者殖民地は私の事業であるに反して、流浪者作事場は公の事業である。労働者殖民地收容期間は比較的長く流浪者作事場のは比較的短い、從て自然流浪者作事場の方で容易に仕事口のなさゝうな者が労働者殖民地に行くといふ工合になるのである、労働者殖民地の仕事は主に農林業なれども労働者作事場のは工業其他雜業的のものが多い。労働者殖民地に在ては被收容者の精神的修養に重きを置くも、流浪者作事場に在ては此點には餘り注意しない等が其最も重なる點である。

以上本題の大体を説いた、吾徒は切に世の經世に志ある人々に對して是等の問題に關し熟慮と決行とを望むものである。

佛弟子小傳(二)

近角常觀

尊者離垢。尊者名聞。尊者善質。尊者具足。

尊者牛王。

釋尊が阿若多懶陳如即ち了本際等の五人を感化して道を得せしめられた時、世界中に於て初めて六人の阿羅漢即ち完全に解脱した人が出來た。即ち佛陀自身と五人の弟子とである。其次ぎに感化を蒙りたる人がベナレス城内の大富豪家なる善覺長者の一子耶輸陀 Magodas (稱天) である。今本文に名聞とあるのが此人のことである、耶輸陀一たび感化を蒙るや、彼の父、彼の母、彼の新婦皆佛道に歸した、加之、耶輸陀の朋友たるベナレス城中に於ける四人の富豪家が其事を聞き、大に尊敬欽慕の念を起して、同じく道に入つた。即ち離垢、善質、具足、牛王の四人である夫故今此處で耶輸陀已下五人を一括して傳を作らふと思ふ。

尊者耶輸陀の傳を見るに如何にも善く、釋尊自身の出家と似た所がある、釋尊は王家の太子であり、耶輸陀は富豪家の獨り子である、各其一族の大切りりて居る所、又、世上の快

く。此の如き爛れたる身、何の樂むべきことがあらむ、然るに愛着の心を起して自ら放逸なる生活をなし、且つ此中に於て樂想を生じて居る而して今腹み爛るゝ此の如し、即ち口に唱へて曰く。我今より是穢の樂を樂まずと夫から園を出て己が室に還り夜に入りて眠りた。夜深に及びて自然に忽ち覺めた、唯諸所に安置してある燈が盞をも歎く程に明くなつてあら、而して四方を見廻はせば、諸の嫁女が悉く眠つて居る。其様子をつくづく眺めるに或は小鼓を顎に掛けて居るものあり、或は琵琶を挿みて居るものあり、或は五絃を挿みて居るものあり、或は箜篌を抱きて居るあり、或は臂を以て鼓を抱きて居るあり、或は手に簫笛等の諸樂器を執るものあり、或は半身を露はして喘息して眠るあり、或は頭髪を解き傾側きて眠るあり、或は涕唾不淨を流して眠るあり、或は口齒相齧して唇を作して眼るあり、而を覆ふて眠るあり、或は仰而きて眠るあり、此の如く嫁女の眠れる有様を見るに恰も死屍の横はあると毫も異なることなきを感じ、心中坐ろに厭離の心を起し、大に憂患の想を生じ深く恐怖の念を來し、擾亂不安にして起ても座ても居られぬ有様である、そこで、其臥床を出で、私かに父の室に入つた、すると亦同様に嫁女が眠りて居る様子が恰も死屍を並べたるが如くである、益々恐れ戰きて私かに家を出で辛ふじて外門を過れ、ベナレス城外賢主門を出で、彷徨ひ出た、實に當時耶輸陀の胸中は察するに餘りある、漸次

行き波羅那河畔に達した、時に河水滔々として漲り、岸に満ちてあつた、して釋尊は彼の河の岸上に露地經行して居られた、耶輸陀は遙かに之を望み見て、聲を上げ叫びて曰ふには、噫我憎めり、噫我恐怖せりと釋尊之を憐み、耶輸陀に向て曰く。善く來れり、善く來れり、汝耶輸陀、此處患なし、此處忍なし、此處安樂なり、此處自在なり、渡り來れ、汝耶輸陀憎むこと勿れ、汝耶輸陀苦しむこと勿れ、耶輸陀之れを聞きて心中の憂苦を免れ、心中の安心を得た、譬へば暑中路を行くに熱の爲めに憎まされ、疲れ極まり、飢渴せるもの、忽ち一の池に遇ひ、其水涼冷にして、其内に入りて、身を洗ひ、喉を濕ほし、一切の熱惱諸苦を消し滅すが如き有様であつて、遙かに佛の慰めの言を聞きて心の憂惱を滅し、心寂定なるを得た、そこで、耶輸陀歡喜身に溢れて、自ら勝ゆる能はず、我穿てる草履を脱ぎ棄て、飛び立つ想をなして、河を渡り、彼の岸に到り、釋尊の所に往きた、釋尊説くに布施の行即ち慈善、持戒の行即ち操行を説き、又生天因縁の行などを説き遂に四諦の法を説かれた、此に於て耶輸陀は全く心中の煩惱を滅し、清淨の法眼を開きた、たとへば淨衣の諸の黒き縷なければ色に入りて直に染まるが如き有様であつた、つくる、耶輸陀なる人の性質を考ふるに、大に感情の濃かな、熱心の然につゝある人らしさ、從て感じが頗る鋭くして、常人の想ひ到らざる人世の根本義に於て問題を捉へ來りて、非

常に埋れてあり乍ら之に満足することが出来ずして、家を遁れて道を求むるなど如何にも善く似てある、抑々耶輸陀の父は富める商人にして耶輸陀は幼少の時より其家法を教はり技術に通じ、書算、簿記より販賣購入等商業的實務に長じ、諸の色繪を染めること、衣服を裁縫すること、香類、五穀、七珍、諸寶物の鑑識了別に至るまで一切皆熟練して曉めて居る、而して父母も非常に之を愛して立派なる住居を與へ、冬は温き室、夏は涼しき家、春秋は調和なる堂を作りて、裝飾を極めて之に住はしめ、飲食も衣服も甘美を盡し、種々の香を用ゐ、多くの嫁女を使はしめた、かくの如く物質上何の不足を訴ふる餘地がない暮しであつた、一日、曉に駒馬の車を驅りて園中に往きて善き地面を觀んと欲して行く途中、釋尊が恰も晨朝に衣を著け、鉢を持し、安詳にしてベナレス城中に入りて食を乞はむとし、長老阿耆踰時即ち尊者正語を侍者として隨へて來られた、其時耶輸陀遙かに佛が前から來らるゝを見、如何にも威儀端正にして行歩沈審なるを拜し、且つ身體態度の莊嚴なること、憎も虚空に星宿の滿つるが如きを見て、既に言ふべからざる清淨歡喜の情を生じ、私かに車を下りて禮をなした、夫より園に至り、善き地を見、漸次行くに隨て、一人の死したる婦女の屍を見た、其身體が脹脹して、爛れんとし、蠅やら蛆やら雜蟲が、所々に喰食して居つた耶輸陀が之を見て心深く汚穢れを感じ、私かに念して以爲ら

常なる憂鬱に陥り、苦痛に沈み、遂に佛陀の和顔愛語の下に満身歡喜踊躍の念を以て満たされた、つゝく、當時波羅那河畔に於ける阿輸陀が佛の御聲を聞きた心持を想像するに如何様で有つたであろうか、千古人の心を清からしめ、安からしむる次第である。而して、幸にも永久間断なく此の岸上招喚の聲は吾人の耳に響てある。

耶輸陀の婦が夜醒めた時、床上夫が居らぬ、平素甚く夫を憶ひ渴仰し深く戀ひ慕へるもの故、大に驚き悲みて耶輸陀の母に告げた、母は非常に耶輸陀を愛する故、大に啼き涙を流し、懊惱して、急ぎて耶輸陀の父に告げた、父亦寵愛一方ならざる獨り子なれば四方八方へ人を遣はし草を分けて探さしめた、自身亦狂するが如く之を尋ね、天曉ならむとするの時、愁憂悽快し啼哭泣涙して賢主門の邊に來りた、漸次行く中に、耶輸陀の草履の蹤跡を見つけた、乃ち之を追ふて遂に波羅那河畔に達したる所、其處に耶輸陀の草履があつた、若しや溺れたり、殺されたりしたのではなかと思ふたが、草履がある已上は遠くはないと思ひて河を渡りて往きた、すると遙かに釋尊を見た、如何にも其威儀の整へるのを仰ぎ見て、慕ふ心を生じ、直ちに佛に尋ねて曰く、大德沙門我子耶輸陀を見ざりしや否やと、佛答て曰く、少らく安坐せよ。久しからずして耶輸陀を見るべしと、乃ち此人の爲めに次第に諸の誘引實行の法を説き漸次煩惱を減し實證を得る恰も淨衣

第一に毘摩羅(Vimala)即ち離垢、第二に修婆暎(Sabbala)即ち善質、第三に富闍那(Purna)即ち具足、第四に伽婆跋帝(Gavampati)即ち牛王の四人の富豪家か耶輸陀に往きて内心を打明けて話し、彼に伴はれて佛の所に往き、佛の説法を聞き、大に感し解脱して、呵羅漢となつた、此に於て世界に十人の阿羅漢が出來た、又耶輸陀の友人五十人が同じく佛の説法を聞き解脱した、是で六十人の阿羅漢が出來た、以て耶輸陀なる人物が平素他より信せられて居つたかを知るべきである、佛は乃ち此六十人の比丘を諸國に遣はして、傳道に出てされた、是が五天笠に佛教の傳播する起源である、而して獨り、耶輸陀のみは未だ生來苦痛に慣れて、皮膚柔軟にして粗衣惡食に堪へざればとてベナレスに止りて父母の養ひを受けつゝ傳道すべきことを命ぜられた、耶輸陀之に従ひ、此に永住し、遂にベナレスの商人五百人を感化して道に入らしめた。

此に一言注意して置くべきは、佛教と基督教と歴史上の大相違の點である、基督は自ら貧にして又之に從ひたる使徒も皆貧賤より起り、貧しきものは幸福也と叫びた、之に反して佛教は位ある者、富める者か、自ら位を捨て、富を擲て、眞實解脫の大平和の門を開かれた、位自身、富自身は、宗教の眼よりみれば一文の價値もない、併位と富とはたしかに貧賤なるよりも宗教心を起し難い、其起し難い地位にありて此の

の染色を受け安き如しと懇々と説法せられた、此説法によりて大覺長者、佛近歸し、法に歸し、僧に歸し、五戒を持ち、初めて優婆塞が出來た、優婆塞は出家せざる男性の佛弟子である、而して此説法を耶輸陀が傍聽して全く解脱して、阿羅漢となつた、されど耶輸陀は身に色々の裝飾を附け、華麗なる衣服を附けて居つた、乃ち佛陀が言はるゝには諸の瓊瑤を以て身を莊嚴するも、心寂定にして、五官の慾を去りて清淨にして、衆生に對して慈悲心を記し、眞實の行をなさば、之を眞の梵行と爲し、沙門釋種とし、亦比丘僧と爲すと云はれたとある以て、佛教の眞精神を知るべきである耶輸陀は佛に願ふて出家した、此に於て世界中に於て七人の阿羅漢が出來た、而して大覺長者の請に應じ、供養を受くる爲めに、其家に趣かれた、して此時耶輸陀は母及び妻の爲めに慈善を初めとて種々の説法せられ、皆苦みを去りて、淨衣の垢穢なれば、染むるに隨ひて其色を受くるが如くであつた、して、皆五戒を持ち、初めて優婆夷が出來た、優婆夷とは出家せざる女性の佛弟子である、佛は僧一族を感じ一家心を盡しての供養を受け終りて、座を起ちて去られた、耶輸陀も佛に隨て行きた。

耶輸陀の道に入りたのはベナレス城中に於ける佛教信仰の一點火であつた、耶輸陀の出家を聞きて、即ち四人の朋友、

如き大決心を起し、大解脱を爲し、而も階級制を以て瘤癰と會問題の解決は此佛陀の精神が活きて来るにあらざれば六ヶ布かろう。

教 界 彙 報

本派新法主の歸朝　歐州漫遊中の本派本願寺新法主には英皇威冠式舉行後茨京を發し露國を經て中央亞細亞に於ける宗教上の實地取調を爲す筈にて是には少くとも半箇年を要すべく上の上支那大陸を經て歸山ざるゝの豫定なれば其の期は多分明年二月比そならんといふ

◎古義眞言宗の派號改稱運動　古義眞言宗は高野、御室、大覺寺、龍藏の各派と眞言宗の稱號を冠せる教王護國寺、泉涌寺、勸修寺、隨心院の一に分れたるが高野派に於ては既に各派分立して同等の資格を有せるに教王護國寺外三大本山が眞言宗と稱するときは自然四大本山の所屬されるが如き觀よりて此程の同派宗會に於て高野派を改めて「古義眞言宗古義派」と稱するに決したり右に付内務大臣の認可申請する爲め願書に調印を求めるが前記四大本山にては高野派外三派は眞言宗より脱出せしものなれば後に残りたる四大本山が眞言宗を稱するは至當なりとの意見を施ける山なれば聯合總裁も容易に同意せざるべしといふ

◎國民禁酒同盟會と淨土宗傳道會　淨土宗青年有志の起せる國民禁酒同盟會本部にて廣く全國に其趣旨を鼓吹するの必要に感して地方巡演を爲すことを先づ大島眞厚師は同宗傳道會の要務を離れて福島、宮城、巣手、青森の各縣を經て北海道を巡廻するの豫定にて去る廿八日出發したり又同宗傳道會は既に第一回の總會傳道を終へ近日更に第二回の傳道を爲す計劃なりといふ

◎佛教音樂講習會　来る八月十六日より向二週間淺草山の宿九品寺内東光社に於て佛教音樂講習會を開き音樂學校教授山田源一郎氏を聴いて音樂の學說、樂器使用法を講じ併せて音樂の實地演習をもなさしむる筈なりといふ

古

今

オーベルリーン (上)

待山生

名譽ある高等の教職に陞進むに足る才、學、識を有しながら、最も優れた一教團の牧師の地位を撰び、終生其地位に安んじて、須臾も心を教團より放さず。全力を擧げて其精神的物質的改善に盡し、斃れて後已めるもの、是れオーベルリーンの本領である。實に彼の行動を終始神に仕ふるの真心を以て貫した。是れその範圍が僅に山間の一僻地に限られながら、彼をして優に近世社會事業の史上に於て忘るべからざる一大人物たらしむる所以で、夫は名譽の爲にし厚利に出づる輩の企て及ぶべき所でない。彼は實に基督教界に於ける牧師として最初の範を垂れたものである。我が佛教界に於て、現に住職たり又た住職たらんとする人々は須らく之を他山の石として参考の料に供すべきである。

有名なる古い都ストラスフルヒの東北約十里程の距離にあるホーゲゼンの山脈の中にスタインタールといふ谷がある。

こには四つの村があつて通じてワルドバツハといふ一つの教團を形作つてゐる。オーベルリーンは即此地に於てこの

たゞ神様の言の書いてある尊い厚い大きい本であるといふことだけはわかつてゐたが、誰一人自から讀んだ者はないといふ有様であつた。

ワルドバツハの教團が初めて好牧師を得たのは千七百十五年で其牧師とは信仰もあり教育もあり且職務に熱心なるスツペルといふ人であつた。彼は赴任の當初より一面説教々諭に努むると同時に他面には大に學校教育を振興して以て教團の宗教的道徳的改善を計ることを主眼とした。で、到着の當日一番先きに或る村の學校へ行つて見た、ところが其學校といふのはわらぶき小屋の天井の低い不潔い一室で、其中に一群の小供がワツカと書いて騒いで居た。スツペルはやうく小供を静めてから「お師匠様は」と訊ねると「彼處に」といふ、見ると部屋の一隅に憐れな寝床があつて、其上に力なく横はつてゐる一人の年寄つた男がある。で、スツペルは其男に向つて「貴方がお師匠様ですか」と聞いたら其男は「いかにも」と答へた。それから「何をお教になりますか」ときくと驚いた、「何も教へません」といふ答を得た、「何故か」と反問したら「私自身が何にも知りませんから」とすましたものである。スツペルは呆れてしまつて「何故貴方自身が何にも知らないのに師匠とはおなりでした」といふと「私はもと豚牧者でありましたが、身體が弱くなりましたので、村の者が私に小供の守りでもさしたらよからふといふのでどうくこうな

りました」といふのが其返答であつた。他の學校も皆矢張り同様で豚牧者の古手、其他労働者がお師匠様となるといふ始末であつたから、從て學校教員は最下等の職業と見做されてゐた。さればはじめスツペルは教團の中から適當の青年を養成して教員としやうとしたが、一向之に應ずる者がなくて大に閉口したが、彼は遂に一策を案出して普通の學校の教員とするのは誠につまらないことであるがドウダ一番學校の先生をして見てはと親達に説き込んだ。すると、此發議は大に衆の賛成する所となつて、忽ち多くの先生志望者が現はれて、彼の指揮の下に且つ習ひ且つ教へることとなつた。而して生徒は初めの程は子供どりであつたが、追々大人も加はる様になつて、教場内は子弟をはじめ、其成長せる兄姉、父母、夫婦と打交つて授業を受けるといふ奇觀を呈した。斯ふいふ次第で、幾時もなく讀書が村中あしなべて流行するに及んだので、スツペルは又五十冊の聖書を購入して、一冊を各三卷宛に分綴し、都合百五十卷を學校に備へつけ、生徒をして取替へ引替へ一卷づゝ携帶せしめ、歸宅の後家内團樂の席で讀ませめるといふ仕組を立てた。斯の如くして彼は初志を實行し非常の好成績を擧げて深く信徒の信頼する所となつたが、三年の後ペルといふ市場町の牧師として聘せられた。所が彼の跡に直つた牧師が例の無能家で、折角の美果も爲めに玉になつてしまひそうになつたので、彼は復た六年の後

教團の長として千七百六十七年より千八百二十六年に至る六十年の間、息まず撓まず獻身的に勤いたのである。此邊は名に負ふ如く一体に石ばかり多くて殊の外瘠地である所へ、谷川の流れは極めて不規則に屈曲して、降雨の節は直に大川の如くなるので、多くもない沿岸の沃地も大部分は爲めに沼澤となつてゐるといふ有様、而して橋もなければ道姿であつた。加之に三十年戦争の亂離に繼いで、ベストの猖獗を極むるに及んでは、ワルドバツハの教區なる或る村で生き残つたものは僅に唯一人の寡婦、他の村では唯一人の少女しかなかつたといふ位で、スタインタールは一時殆ど無人の境地化して丁ひ、田園の如きは殆んど荒蕪に歸した。土地及び氣候の粗惡であるが如く住民も亦至て野蠻で、蒙昧無知とは彼等に採つて頗る恰好の形容語であつた。彼等は名義上ルーテル教會の所屬となつてゐて、千八百十八年以來常置の牧師はあつたものの、邊境の山地で加ふるに收入が少ないと來てゐるから、尋常の牧師等はとても遣て來ない、來るものは大抵他で失策をしたとか、若くは老朽職に堪へぬかといふ理由で貶謫的處分を受けた連中で、いはゝ屑ばかりであつたから、宗教上の成績は固より舉らふ筈がなかつた。學校もあつたが是れ亦有名無實で、読み書きを授ける所ではなくて單に小供の遊び場たるに過ぎなかつた。されば聖書の如きも

の歎呼の下に、再びスタイルに歸て來た。爾後彼は引續いて七年の間舊の如くに勤いたが、粗い氣候の爲め大に健康を害して、終にスタイル・スブルヒの名譽ある招聘に應じて再び教團を去るの止むなきに至つた。が、彼が之を決行したのは、教團の爲め頗る適任にして有爲なる後繼者を得た後であった。其後繼者は別久でない、ドクトルヨハン、アリードリロ、オーベルリーン其人であつた。

オーベルリーンは千七百四十年にストラスブルヒで生れ、父親は中學の教師で母諸共至て信仰の深い方であつた。彼は幼少の時から玉子を入れてあるかごをつき落した所へ出遇つて、大に其子供等を叱辱して泣ひてゐる女を暫しと見ゆ、急いで家へいん逐行つて自分の貯金箱を持て来て、中の金を悉皆其女に與へ。まだ禮の言もきかないうちに、再び其場を立ち去つたといふことがある。又或時は貧しい老女が古着屋で一枚の着物を買ふとしたが、少しばかり金が足りない爲めどうく相談が出来ないで、悄然として出てゆく姿を見た。彼は其不足額を内處で古着屋の手に渡して、どうぞ彼の女を呼び戻して賣てやつて呉れと頼んだといふこともあつた。流石後年會社事業の大業となるだけあつて小供の時からどこかに衆と異なる點があつたものと見ゆる。

彼は既業に中學にあるときから教師(教會の)とならぶとい

うが此勧誘を受けたときは、丁度軍隊布教師となる約がとゝのつて、不日任地に赴く運びになつてゐたのである。が、彼は大にスタイルの所説に感激して斷然其榮職を他の候補にゆづり、自らは舊つてスタイルに赴くことに決定した。

オーベルリーンが愈教師としてスタイルに乗り込んだのは同年の三月で、段々と教團の有様を視察すると、其開化の程度といつたら精神的の側も物質的の側も聞きしにまして低いものであつた。で、彼は熟考一番どうしても一定の物質的進歩の基礎に立つにあらざれば、健全なる精神的發展の庶幾すべからざるに想到し、茲に彼は布教及び教育の進歩を計ると同時に、其擴張を容易にし其有効を確保せん爲めには進んで一般の社會的慈惠事業的及び經濟的事項の發達に付けて注意を怠るべからざるを覺知した。スタイルに於ける彼の活動は皆悉く此方針から割出されたものである。

社 會 小 観

◎ 日露協會　過日發起人會を開きたる日露協會に就ては世間或は政治

上の意味を有するにあらざるかと疑ふものあれど右は全く社交的のものにして其目的とする事業は左の如し

一、交五兩國の事情を紹介すること　一、日露語學の研究を獎勵すること　一、日露兩國に於ける通商其他の實業に関する諸般の調査を爲すこと　一、通商其他の實業者の爲め諸般の援助を爲すこと

ふ決心をして、十五の年にストラスブルヒの大學に入りて熱心に神學を研究した。卒業後彼は數年間家庭教師として有名なる外科醫ドクトルチケンバーゲンの家に居つたが、千七百六十五年専ら教職の準備に從事せん爲め、去つて或る家の一室を借りて住し、こゝで凡そ二年の間心を凝らして研究に耽つた。夫のスタイルの教師スウオボルがオーベルリーンの所へ訪ねて來たのは千七百六十七年の初で、夫れ

は、誠に奇妙な會見であつた。或日のことスタイルは突然オーベルリーンの處を訪ねて、やがて其部屋に通つて見る所、ランプの上に一つの小さい鍋がつるしてあるので、余りあいかを問ふた。するとオーベルリーンの笑つて答へる様には、イヤ實は是は私の臺所で、兩親の許で晝飯を頂きましたと、其歸りがけに少々パンを持て参り、晩の八時頃になりますとそれを此鍋の中へ入れまして、其上に水をさし少し鹽を加へ、ラップを其下に置いて其光りで勉強してゐますと、やがて半時十一時となりましてお腹がすいてくる時分には、最早御飯の仕度が出来て居るといふ始末で、其味といふたら大抵の御馳走の及ぶ所ではございません」といつた。之を聞いたスタイルは「何うる貴方は怡もワルドベツハ教團の牧師に出来上つてゐる人物だ、何卒是非彼地へおいでをねがひたい」といつて酔々とスタイルの事情を述べた。オーベルリ

◎ 江原氏に對する訴訟　京橋區の有權者尾後貫朝五郎氏外三名は江原素六氏が自分等の承諾を経て勝手に自分等の名を署したる推選狀を發したるは取も直さず私文書偽造の所爲なりて辯護士大澤慎吉氏に依頼して裁判所に持出さんとなしたるを聞込みたる江原氏は大に驚き早速駆け付けて示談を申込みたる處、尾後貫氏等の態度は極めて強硬にて此の際江原氏は第一政友會の籍を脱すること、第二府下の各新聞に謝罪狀を掲載すること、第三さきに推選狀を配布したる戸毎を巡りて推選狀取消の旨意を掲げることの三箇條を持出したるに江原氏の應ぜざるより右三氏は愈々江原氏を相手取りて東京地方裁判に出訴せりといふ

◎ 一學年間の生徒處分　文部省の調査に係る明治三十四年四月より三十五年三月に至る全國中學校、高等女學校生徒の一學年間に處分を受けたる者の數左の如し

中學校	懲戒したる者	内、體質一、二十九	體質六二一
停學	一、七九六	放校	五五 戒節其他 二、二七四 退學を命ずたる者
一、九〇九			
一四	正當の事由なく一ヶ月以上欠席	二七〇 學力劣等	二二六 一年以上欠席
三二	内、授業料不納	九八二 其他	一、三〇九 除名したる者
高女學校	懲戒したる者	六	内、體質二 放校 一 戒節其他 三
一ヶ月以上欠席	六一		
其他	九四		

◎ 北海道人口の增加　北海道の人口増殖は拓地事業と共に著しき成績を呈し来れるが其筋に於て最近調査の人口は百一萬七千二百四十四人の多きに上り之を前年に比すれば約四萬人の増殖なりといふ

◎ 西藏協治條約　外務大臣は兩三日前陸清公使に對し露清兩國政府間に於て西藏統治に關する秘密條約の締結有無に就き精査すべき旨の内訓を發せられたる由なるが、卷間傳ふる所の西藏協治條約を以て果して事實とするも是を以て直ちに北清に於ける利益権を侵害したる者と推定するを得ざるも唯だ内訓の要旨は是に關聯する他の重大なる國際問題を提起する事なきや否やを確かむるの必要あるか爲めなりといふ

◎各移民會社の移民取扱數 全國十二の移民會社の昨三十四年度に於て取扱ひたる移民數は合計三千五百四十七人にして内、四百六十人は契約移民、三千八十七人は非契約移民なりといふ。

◎布哇移民渡航の禁止 布哇移民の増加に付き其問題種々の弊害を生じ且つ米國にてはホノル、より續々入込む日本労働者多き爲め輿論の反抗甚だしからんとするにより我政府にても不得已一時之を中止して前後策を講ずるの必要に迫りたれば自下之が勵行中なりといふ。

◎吳同盟罷行職工の意見公表 今回の吳同盟罷行に加はりたる職工は五千百五十餘名にして十六日の夜暴行なしたるは千六百四十八名なりといふ彼等は斯く一部の者の暴舉により全体の意思の世人に誤解せられたるを遺憾とし左の意見書を公表したりといふ。

同盟休業の旨趣

吾職工一同が去る十六日を期し同盟休業せしは自己の利益のみを目的に休業せしものに無之要するに左の理由に基きたる者に有之候
一、就業服と通ひ服とを區別せしめざるより衣服は時々新調せざるべからず薄給の職工共は到底堪へざること
一、假令過失に出づるにても是迄は間違は一人分か一分半分位なりしに今回は五人分以上の間違を課し尙組長迄も同一に罰せらるゝは頗る過酷の處分にして而も是又到底堪へざること

一、是迄業務の材料は直に支給せられつゝありしに今回白銀一本たりとも伍長認印なき以上は受取るを得ざるより其間に時間の費へること渺々からず故に事業の進行上非常の障害を來たし爲めに佐世保造船部に比して通色あること以上之標にて唯規則のみに拘泥し毫も事業の進行に著眼せざるを以て名譽ある造船所を爲さんとする希望も到底不可能なりといふべし加之其規則たるや外國の實例を其儘當嵌めたるものなれば從來の慣例を悉く無視して遂に執業に堪へざらしむに至りしなり然れば予等の企てたるは唯反省を促す迄の目的にてありしに不幸にも間違に處されたる職工等は血氣に逸りて終に暴行の手段に出でたるは實に千秋の恨事なりとす予等の心事只夫れスの如くなるに尙廠長の邸宅を襲撃するとか叩き殺すとかの風説を傳播せられたるは遺憾至極なりとす云

◎阿片吸食者二萬人の減少 臺灣の阿片吸食者の取締は士匪の熄滅と監察の完備とに併ぶて漸く緻密となり其結果として新に癌に陥るは殆んど之なく從來特許を得たる癌者が煙及び死亡の爲め全島吸食者は日に月に減少を來す状況なるが本年三月吸食者數全体は十四萬人許にして一昨年九月に比すれば三萬人を減少せりといふ。

◎女子教育の進歩 文部省の調査に依れば全國に於ける校數八千生徒二萬三千百八十人の多きに達し三十五年の卒業者總數は實に二千八百六十人に及び之を明治二十一年に於ける卒業者總數六十一人に比すれば大なる進歩なりと

◎鑽毒調査 鑽毒調査の各専門委員は各其部下を率て被害地に出張し其の數已に五十餘名に達せりとのことなるが結了に至るは來る十月末頃なるべしと

◎雲

通

久

いづこより起ちのぼりしか
しら雲の

またいづかたに
消えて行くらん